

竹林の隠者—富士正晴の生涯

三宅 清

富士正晴（1913-1987）は、本名、富士正明、昭和を代表する小説家、詩人、画家である。茨木の『竹林の隠者』と言え、思い出す人がいるかも分からないが、一般的には知る人が少ない。しかしながら、その生涯に遺した著作と書画、波瀾万丈の生涯（師事した竹内勝太郎への想い、後輩作家の育成、型破りの愉快な変人奇人振り）を考慮すると、司馬遼太郎に匹敵する遺産を後世に残したように思う。筆者は1971年、茨木市内の会社に就職、翌年、富士の長女が入社してきたことから富士正晴を知った。富士の記念館が茨木市中央図書館に出来てからは何度も足を運び、その人間性に益々興味を持った一人である。最近、大川公一著の『竹林の隠者-富士正晴の生涯』を読んで改めて感動し、富士正晴の生涯を多くの人に知らせることが肝要との思いに駆られ、特に印象深い箇所を纏めてみた。

富士正晴は茨木市安威の古い家屋に酒杯片手に泰然と構えて、言いたい放題の憎まれ口を叩き、『竹林の隠者』とか『藪のなかの酒仙』だとか天然記念物扱いされていた。しかし、その書くものは酔っ払いのクダとは言えず良書を快速度で出した。まれにみる近代的知性の持ち主であった。富士の大きな字で書かれた葉書は、ペンでも毛筆でも多くの人に評判が良く、見た瞬間、元気が出たようである。

—松田道雄、藤沢恒夫、桑原武夫の富士正晴追悼文のまとめ。

富士正晴は三高に入学後、竹内勝太郎との出会いもあり同人誌『三人』を刊行するほど文芸に熱中し、理系から文系への再入学、2度の落第などから三高を中退した。中国での悲惨な戦争体験から、復員後は新聞社でアルバイトをして同人誌『VIKING』を主宰、京大学者達や作家達と交遊しながら作家活動を続けた。10歳後輩の司馬遼太郎も、中国での戦争体験から、復員後新聞社で勤務し、京大学者達や作家達と交遊しながら作家活動を続けた。このように富士と司馬には共通部分が多く、文芸春秋”日本人を考える”で対談、深夜でも電話で語る間柄であった。違った点は、司馬が中退などせず、処女作『梟の城』で直木賞を受賞し順調な作家人生であったのに対し、富士は3度の芥川賞候補、1度の直木賞候補になりながら、それらの賞に恵まれなかったことである。これには、富士の竹内勝太郎に関する新聞のインタビューが参考になる「勝太郎との出会いは、転機という生易しいものでなく、その一生が勝太郎との出会いによって決定され、一生が転機の連続みたいなものだった」。日本人は社会に依存し、慣用句でいうところの何らかの”電車”（大学や大企業など）に乗りたがる。西洋人は個人が独立して社会への依存をいやしみ、電車に乗りたがらない。芥川・直木賞は、小説家にとって”電車”であることは周知である。司馬は、「富士は三高を中退してからは世の中から下車した真如の人」と称し、一休、良寛と比した。そして、“その精神は世にまれな器量人”と題して、富士に対する敬愛の念あふれる追悼文を贈った。

—司馬遼太郎の富士正晴追悼文、および風塵抄-「電車と夢想」を補筆

1. 竹内勝太郎との出会い、同人誌『三人』

徳島県三好郡山城谷村（現三好市）出身。神戸三中（現・長田高校）から1931年、旧制第三高等学校に進む。文芸に興味を持った富士正晴は、同年、志賀直哉に会いに会って詩集を見せ、竹内勝太郎を紹介された。1932年、野間宏（野間の妻は富士の妹なので義弟）、竹之内静雄（旧姓桑原）と出会い、

詩の同人誌『三人』を創刊。三人は竹内の人間性に惹かれ、詩集をみてもらうため勝太郎への訪問を重ねた。(『三人』のメンバー：富士正晴、野間、竹之内、井口浩、広瀬正年、富士正夫、堀内進、・・・)。富士は三高理科に入学したものの、2年目にフランス語を勉強したいということで中断、翌年受験して三高文科に再入学。しかしながら、詩作活動に夢中で学業がおろそかになり、試験の前の空き巣と友人井口の悶着事件も重なり落第、1934年2回目の1年生をやり直すも三高中退(1935年2月)。富士曰く、『4年間、1年生を続けた人間はおらへんと思います』。

* 竹内勝太郎との出会い

「勝太郎との出会いは、転機という生易しいものでなく、その一生が勝太郎との出会いによって決定され、一生が転機の連続みたいなものだった」。勝太郎のスケールの大きさ・人間性に惹かれ、生涯、勝太郎に師事することになった。

— 晩年、富士が新聞のインタビューで。

* 司馬が聞いた竹内勝太郎のこと：

富士には深夜親しい物たちに酔っ払い電話をかける癖があって、その聞き役には、松田道雄、桑原武夫、貝塚茂樹をはじめとして錚錚たる人物が並び、司馬もその一人であった。司馬が深夜、富士から聞いた竹内勝太郎の話は、「美しいといえば居たたまれないほど美しい話」であったが、富士はどこにも書いていないと思えたので、司馬も誰にも喋っていない。これには富士に影響を与えた二人の人物の話(注：鉄橋のおっさん、下駄の鼻緒の酌婦)から想像すると、勝太郎は市井人の善良さ、やさしさを内包した優れた詩人であり、なみ大抵のものでない深い宗教的魂の持主であったことが想像される。

— 司馬遼太郎、富士正晴画遊録に寄せて補筆(大川公一、p61)

(注) 鉄橋のおっさんの話

富士が小学生の時、列車の来ない時間を見はからって鉄橋を渡り始め、かなり進んだ時に向こうから汽車が来た。戻るに戻られず立ちすくんだところへ一人の土方風の男が飛ぶように来て、彼を小脇に抱きかかえて引き返し、一言も言わずに立ち去ったと云う。

下駄の鼻緒の酌婦の話

富士が三高生の時、下駄をはいてぬかるみを歩いて鼻緒が切れ立ち往生していると、そのすぐ前の酌婦らしい女が出て来て、何か布を裂いて鼻緒をすげて無言で立ち去った。{その後、富士は自分と同じような人を助けるため下駄の鼻緒を学生服のポケットに入れて歩き、実際に武道専門学校の大きな学生の鼻緒をすげかえて、びっくりさせたい}

* 竹内勝太郎が黒部峡谷で転落の死について(1935年6月)：

遭難の瞬間：岡崎美術館の同僚、水田寅一と二人で上高地へ抜ける予定であったが、雨天のため予定を変え、平湯から宇奈月・黒部峡谷を目指し遭難した。猿飛付近の段崖で足を滑らせ谷底まで吸い込まれる如く落下、40日後に胴体のみ発見された。

明石染人(鐘紡山科工場長、勝太郎の誌友であり心友)の追悼文：

富士が述べていた勝太郎のスケールの大きさ・人間性について詳しく書かれている。勝太郎の詩は、歌舞伎研究から原始民族の宗教的舞踊、民族的風習に至るまで研究、そのため言語学、宗教学、考古学の域まで掘り下げた学徒の態度で敬虔に書かれている『芸術民俗学研究』(立命館出版部)。

— 富士正晴、榊原紫蜂、朝日新聞、1985

* 竹内勝太郎遺構全集の出版：

師の不慮の事故を悲しみながらも、原稿、日記、手紙などを未亡人から受け取り、竹内勝太郎遺構全集の出版を思いつく。自分の生活をそっちのけで大阪府庁での勤めを止め、家庭教師や会費、有志（榊原紫峰、野間、桑原、堀内、田中、父母から）の寄付を仰ぐ。これに対し世間からは「何たる酔狂、死んだ師匠をだしに生活費を寄付させている」との批判もあったが、1931年、竹内勝太郎詩集『春の犠牲』が弘文堂から刊行された。その後、太平洋戦争を挟んで、都合7冊の竹内の本を世に出した。

2. 戦争体験

1943年、富士は末妹安子の同級生、内田や江子と結婚

1944年、富士は31歳にして陸軍に応召、南京、桂林、広州等を行軍する。戦争にのぞみ、必ず生きて帰ること、戦時強姦をしないこと、大いに飯を食うこと、ビンタを張られても無理な仕事は避けること、という鉄の規則を立てて、結果「自称・三等兵」のその立場を貫くことになる。大川公一、p61
一富士正晴『帝国軍隊に於ける学習・序』、富士正晴、一司馬遼太郎との対談『サルが背広を着る時代』、

3. 同人誌『VIKING』（1947-現在に至る）

1945年、復員後、同人誌『三人』の復興の話があったが流れ、1947年に同人誌『VIKING』を創刊することになった。

メンバー：『三人』の富士、井口、広瀬正年、富士正夫、堀内進、島尾敏雄、林富士馬、斎田庄吉、庄野潤三、久坂葉子、小島輝正、小川正巳、岸本通夫、高橋和巳、島京子、津本陽など多士済々。

毎日新聞などで臨時雇いしながら、京大の学者（吉川幸次郎、貝塚茂樹、桑原武夫）と交遊しながら、作家活動を行い、多くの後輩作家を育てた。

弘文堂で編集していた清水静栄と再婚（1949年）、3人の子に恵まれる（年子、信子、重人）

* 島尾敏雄（1917-1986）：『VIKING』へ掲載した中篇「単独旅行者」が野間宏の目に触れ、『近代文学』系の雑誌『芸術』へ転載されることとなり文壇に認められる。伊東静雄紹介の紹介で『VIKING』に参加したが、戦争体験・姿勢の差によって富士と対立し脱退。

島尾に対する富士の評：“世の中に不条理があると思うから憤慨するが、人間の世界は条里もクソもこんなもので、世の中が完全なものでないと思えば、憤慨することがない”

* 久坂葉子（1931-1952）：島尾敏雄の紹介で『VIKING』に参加、富士正晴の指導を受けた。『落ちてゆく世界』の改作『ドミノのお告げ』は1950年の芥川賞候補となる。4度の自殺未遂、『幾度目かの最期』を書き上げた後、1952年の大晦日に阪急六甲駅で鉄道自殺を遂げた。久坂の追悼号を『VIKING』と『VILLON』の合同号として編集中に、富士は無学であるとか独善的で家父長制をしているとかの批判があったようで、2度目の脱退騒ぎ（小島輝正ら7人の学者連）があった。『VIKING』を立て直したのは、久坂の仲良し藤井和子と坂本真三であったと富士は回想している。

*『VIKING』は庄野潤三、高橋和巳、津本陽ら有力作家を輩出し、現在も活動中。 <http://viking1947.com/>

*後に直木賞作家となる山崎豊子、後に芥川賞作家関高健は、毎日新聞図書室で富士と交流、富士の博覧強記・雄弁に驚いた。富士は二人の作品を読んで将来を予測した。このころから、版画と書画を始め

た。

* 司馬遼太郎：1950年、産経新聞の身の上相談の回答者をしている頃、福田定一の『梟の城』の書評を書いたのが交遊の始まり。

* 三島由紀夫：1943年、七丈書院の顧問をしている頃、七丈書院から出版されていた三島の「処女短編集『花ざかりの森』を世に送り出すのに尽力した」と三島が「私の遍歴時代」で回想。

* 小田実：1961年、小田が茨木の家を訪ねて来て、小田の小説の書評（小田と開高の類似性）を指摘したことが始まり。

< 富士正晴の作品 >

『敗走』『競輪』『徴用老人列伝』で3度の芥川賞候補に挙げられ、1968年に『桂春団治』で毎日出版文化賞、1971年に大阪芸術賞、1987年に関西大賞大詩仙賞をそれぞれ受賞。その他の代表作に『帝国軍隊における学習・序』（直木賞候補）をはじめ、『贗・久坂葉子伝』『往生記』『軽みの死者』があり、数多くの小説、エッセイを残す一方で座談の名手でもあった。 付録に作品リスト

4. 富士正晴の文人画

富士は晩年まで茨木市内の竹林に住んだことから、竹林の隠者と称され書画もよくした。

東京銀座の文芸春秋画廊での個展（1965）には、吉川幸次郎、桑原武夫、貝塚茂樹らの学者が受付けをした。この会場から鶴見俊輔が小田実と連絡をとり、ベ平連運動が始まるきっかけとなったという。

文春画廊の個展の後、富士は大阪東宝画廊、京都祇園の俵屋画廊（画廊主：俵屋健龍）でも何度か個展を開き、絵を書く文士として認められるようになった。

* 『富士正晴版画冊』東京書院、・・・五木寛之の序「垂手の画人—富士正晴さんのこと」

狩野直喜（京大の中国文学者で名筆家）は、若いころの富士の名筆を見抜き、後輩の桑原武夫に紹介した。桑原武夫は、「富士の大きな字で書かれた葉書は、ペンでも毛筆でも多くの人に評判が良く、見た瞬間、元気が出る」と語った。

* 富士の絵の出発点

中学時代、授業に退屈して教科書に書いた落書き（新聞の挿絵）。影響された画家は、

中川一政、石井鶴三、村上和義。鉄斎、棟方志功、ピカソ、鳥羽僧正の「鳥獣戯画」など

（ブラック、マチス、ドラン、ダ。ウィンチ、ミケランジェロ、ゴッホ、マネ、モネ、ルオー、相阿弥、永徳、光琳、大雅）

* 徳島県民の歌（1971）：毎日新聞時代の知人、松村益二が懸け橋となり作詞。続いて「阿波の子狸譚」が文化庁の芸術優秀賞。 音楽はサテイのピアノソナタ、島京子の『竹林童子失せにけり』

5. 富士正晴の晩年

戦争であれほどの被害を加えながら、どうして日本人が豊かになれるのか。富士は高度成長を頑固に拒否した。中国大陸での2年間の生活を被害者としても加賀者としても決して忘れなかった。アメリカ軍のベトナム北爆は毎日が憂鬱で体調を崩しながらも酒を飲み続け、魯迅選集を読むことで魂のバランスをとっていた。

* 「榊原紫峰」（1984）：富士正晴、京都新聞の連載、朝日新聞社刊行 紫峰の最も詳しい著作。紫峰の心友であった竹内勝太郎の記述も多い。

***大詩仙賞（関西大賞）** 京都国債会館での記念講演（1986）

竹内勝太郎との決定的な出会いと『三人』、三高中退、勝太郎の死、戦争体験、『VIKING』、自分の絵について講演。

***「富士正晴言遊録 天下泰平」**

大阪新聞に連載（1987）、死の二カ月前、自分の生涯をひょうひょうとした語りでまとめる。

6. 富士正晴の死去と追討文など

病院へは一切行かず、「健康けっこう長寿いや」で通し、亡くなる直前まで普通の生活、最後は急性心不全による突然死（1987.7.15、73歳9カ月） 死後、多くの人々が追悼文を新聞や雑誌に書いた。その一部を示す。

松田道雄：『竹林の隠者』とか『藪のなかの酒仙』だとか天然記念物扱いされていたが、まれにみる近代的知性の持ち主だった。近代的というのは『近代的自我』の近代で、冠婚葬祭を含めて日本のムラ共同体にあるべたべたしたものを一切拒絶していた。ムラ共同体に属さなかったから、文壇からも詞壇からも部外者のように扱われた。彼はいくつかの『伝』を書いた。竹内勝太郎、榊原紫蜂、桂春団治など、どれも文学であると同時に史家の知性でつらぬかれていた。現世をつまらんと云っていたが、青春期に同人誌『三人』にのせた詩の壮絶な世界に生きた彼には、あとの人生は兵卒としてかりだされた日中戦争を含めて、どうでも良いことのようにであった」
—京都新聞

司馬遼太郎： 司馬が「その精神は世にまれな器量人」と題した追悼文には、富士に対する敬愛の念があふれ、その最後に印象深いものがある。司馬は富士を“真如の人”と称し、「世の中から下車した」一休、良寛と比した。「富士は三高を二度落第して退校してからは、世の中から下車した。虚空からきた魂のままこの世を生き、詩と文章を少し書き、そしてどこかへ帰って行った。遺族は故人の気分をよく知っていて、葬儀はないという」
—富士の死の20日後、1987.8.4の大阪新聞朝刊。

司馬は産経新聞に連載された『風塵抄』の「電車と夢想」で、電車と下車について繰り返していた。

「人は皆なにがしかの電車に乗っているのである。あるいは乗るべく準備をしている」—そんな慣用句でいうところの何かはここでいう“電車”である。小説家には芥川・直木賞という電車があるのは周知の通りである。高度の科学技術が経済を動かしはじめ、その結果、生産に携わる人数はうんと少なくなり、「相当な知力の人が生涯、アルバイトをし続ける、いわば軌道をもたない人が増えることによって、“無乗車組”がひょっとすると社界の三分の一を占める時がくるかも知れない。「西洋人は個人が社会の中で独立している姿を好み、依存をいやしむ。“電車に乗らない”は依存しないということである。そういう独立人の中から深い思想が生まれてきたりすれば未来の日本のために慶賀すべきことである」司馬はこの独立人の具体的人物像として、富士正晴を思い浮かべていたに相違ない（大川公一）。

藤沢恒夫(1904-1989)：「変人奇人」より

「世の中は優等生や堅実派の人間ばかりでは面白くなく、周囲を明るくする型破りの愉快的変人奇人が混じってこそ、そこに人生の大らかな味がにじみ出て来るが、最近はやせちがらくなってきたせい、そういう人間が減ってきた。文士と呼ばれる人たちにも、変人奇人は少なくなったような気がする。関西在住の文学者のなかから変わりものを1人だけ挙げるとなると富士正晴だろう。茨木の山手の竹藪の中の農家風の古い家屋に、酒杯片手に泰然と構えて、言いたい放題の憎まれ口を叩いた。その書くものが

また、酔っ払いのクダかと思えばそうでもなく、富士以外の何者にも書けない見事に曲がりくねった珠玉の文章であった。酒好きには仕事嫌が多いのだが、富士の場合は正反対で、仕事の間口は広いし、彼ほどの勉強家は少ないだろうと思われるくらいである。良い仕事を快速度で量的に書きあげては著書が出るのだから、あれだけ飲んでいて一体いつの間に仕事をするのかと不思議な気がすることもあった。物を書くのが好きで苦にならず、書くことが次々に浮かんでくるのだろうが、そこが彼の怪物たる所以である」

その他、瀬戸内寂聴、天野忠、栗津則雄、津本陽らの追悼文が大川氏の著書に紹介されているが省略。

没後 1988 年に岩波書店から刊行された『富士正晴作品集』（全 5 巻）の宣伝文句

・・・「不逞の知力、千里眼の直観、広い器量をそなえた詩人、作家の全貌」

* 富士正晴記念館の設立

1992 年には茨木市中央図書館に富士正晴記念館が開館した。献身的に働いた廣重聡氏は『VIKING』に乗船した元編集人。遺族が茨木市に寄託した富士正晴の蔵書、原稿、書簡、絵などを全て整理し、目録と詳細な年譜も作り上げている。富士の精神は廣重聡氏に最もよく受け継がれている。

* 富士正晴生誕記念碑の建立

1999 年、生誕十周年を記念して故郷の徳島県三好郡山城谷に生誕記念碑が建てられた。

主な参考書：

- 1) 大川公一、竹林の隠者-富士正晴の生涯、影書房、1999（1947 生、成城学園教諭、東大文学部卒）
- 2) 司馬遼太郎、富士との対談—サルが背広を着る時代、文芸春秋、1976.
- 3) 司馬遼太郎、風塵抄—電車と夢想、中央公論社、1991.
- 4) 富士正晴、往生記 創樹社 1972
- 5) 富士正晴、富士正晴画遊録 フィルムアート社 1984.
- 6) 富士正晴、榊原紫峰 朝日新聞社 1985.9

付録 富士正晴の作品リスト

贗・久坂葉子伝 筑摩書房 1956 のち講談社文庫、ちくま文庫、講談社文芸文庫

競輪 三一新書 1956

游魂 パトリア 1957 (新鋭作家叢書

たんぼぼの歌 河出書房新社 1961 改題「豪姫」新潮文庫

帝国軍隊に於ける学習・序 未来社 1964

あなたはわたし 未来社 1964

贗・海賊の歌 評論集 未来社 1967

桂春団治 河出書房 1967 のち講談社文庫、文芸文庫

八方やぶれ エッセー集 朝日新聞社 1969

往生記 創樹社 1972

紙魚の退屈 人文書院 1972

西行 出家が旅 日本の旅人 淡交社 1973

思想・地理・人理 エッセイ集 PHP 研究所 1973

酒の詩集 おさげにやふかいあじがある 光文社 1973 (カッパ・ブックス)

中国の隠者 乱世と知識人 1973 (岩波新書)
日本の地蔵 毎日新聞社 1974
パロディの精神 平凡社 1974
へそ曲り名言集 人文書院 1974
一休 筑摩書房 1975 (日本詩人選)
狸の電話帳 潮出版社 1975
富士正晴詩集 五月書房 1975
書中の天地 白川書院 1976
藪の中の旅 PHP 研究所 1976
日和下駄がやって来た 冬樹社 1976
どうなとなれ 中央公論社 1977.6 のち文庫
竹内勝太郎の形成 手紙を読む 未来社 1977.1
聖者の行進 中央公論社 1978.2
高浜虚子 角川書店 1978.10
大河内伝次郎 中央公論社 1978.11 のち文庫
書中のつき合い 六興出版 1979.2
極楽人ノート 六興出版 1979.6
心せかるる 中央公論社, 1979.10
不参加ぐらし 六興出版 1980.2
駄馬横光号 六興出版 1980.7
ビジネスマンのための文学がわかる本 日本実業出版社 1980.11
せいてはならん 竹林翁落筆 朝日新聞社 1982.9
御伽草子 岩波書店 1983.3 (古典を読む)
乱世人間案内 退屈翁の知的長征 影書房 1984.6
狸ばやし 編集工房ノア 1984.4
富士正晴画遊録 フィルムアート社 1984.7
軽みの死者 編集工房ノア 1985.3
恋文 弥生書房 1985.12
榊原紫峰 朝日新聞社 1985.9 紫峰の最も詳しい著作。紫峰の心友であった竹内勝太郎の記述も多い。
富士正晴作品集 全5巻 岩波書店 1988
碧眼の人 編集工房ノア 1992.4
ちくま日本文学全集 56 富士正晴 筑摩書房 1993.6
風の童子の歌 詩集 編集工房ノア 2006.3
富士正晴集 影書房 2006 (戦後文学エッセイ選)

以下、〈共著など〉 省略

伊東静雄研究 (編) 思潮社 1971
苛烈な夢 伊東静雄の詩の世界と生涯 林富士馬共著 社会思想社 1972 (現代教養文庫)
ある地方民間放送 岡田みゆき共著 出版 1976